

ニッポン ドクター和の 臨終図巻



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医科大学卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

99歳で亡くなられた英国フィリップ殿下の訃報を当連載で取り上げたのは昨年4月。その時、こんなことを書きました。
「大往生」と書く、それまで病気一つ、ケガ一つなかった老人が突然バタッと逝くようなイメージを持たれる人もいます。しかし、そんなわけがありません。平均寿命を超えて生きるといふことは、何かしらの病気や不自由と共存していくということなのです。
フィリップ殿下は高齢になつてからも精力的に活動をされていましたが、90歳頃からは入院を繰り返していました。

273 エリザベス女王

96歳…フィリップ殿下との麗しき人生

死の2日前まで笑顔で公務

(英王室提供・AP)



握手を交わされ

たことは、英国国民の誇りでしょう。

夫の死から1年半。日本国民からも愛されていたエリザベス女王の大往生を今回は書きましよう。9月8日に女王は療養先であったスコットランドのバルモラル城で静かに息を引き取られました。享年96。死因の詳細は語られていませんが、おそらくは老衰であると英メディアは報道しています。
バルモラル城は、かつて女王がフィリップ殿下からプロポーズを受けた場所でもあるそう。女王がフィリップさんと恋に落ちたのは13歳のとき。そして愛は実り、長い人生を分かち合いい、かつて求婚された場所での人生を終わらせる。なんとという麗しき物語か。しかも夫婦とも大往生。

フィリップ殿下同様、女王も年齢相応のご病気や不具合を経験されてきたに違いないと推察されます。96歳まで生きる人は今の時代、珍しくはありませんが、亡くなる直前まで自分で歩けるほど元気な人は、実はそんなに多くはいません。たいていは1〜2カ月前から、少しずつ食べられなくなり床に伏せ、徐々に枯れて終わる。それが老衰です。

エリザベス女王も、コロナの影響もあって昨年10月以降は公務を欠席されることが増えていきましたが、亡くなる2日前、保守党党首のトラス氏を新首相に任命、笑顔で握手を交わされたのには驚きました。

僕も大変お世話になってい、宮本頭二医師と礼子医師が書かれた『欧米には寝たきり老人はいない』(中央公論新社)という本のことを思い出しました。
日本が、世界有数の長寿大国となつて久しいですが、欧米との差は、90代や100歳代の高齢者にどこまで延命治療を行っているかの差であることに、本書を読むと気づかされます。老衰の過程で自分で物を食べられなくなったときに、ヨーロッパの多くの国では、点滴や胃ろうの処置を積極的にに行いません。
死の2日前まで笑顔で公務をこなし、穏やかに旅立った女王。最期まで尊厳を失わなかつたことは、英国国民の誇りでしょう。